イギリス・マンチェスター大学における教員養成の成立
― Day Training College の教育理念に着目して ―

山崎　智子
（北海道教育大学）

1．はじめに

本研究は、イギリス[1]の大学における教員養成成立期の教育理念を、マンチェスター大学（University of Manchester）の通学制教員養成カレッジ[2]（Day Training College、以下DTC）を事例として検討するものである。

イギリス教師教育研究では、大学における教員養成は周辺的なテーマとして扱われてきた。それは、戦後の教員養成が、非大学の高等教育機関である師範学校[3]（teacher training college ／ college of education）によって主に担われ、大学における教員養成が量的な点で言えば非主流派であった[4]ことに起因する。この点、師範学校が戦後すぐに大学化し、大学における教員養成が少なくとも法制度上は広く実施されるようになった日本とは異なる。日英以外の国に目を向けると、20世紀初頭のアメリカの教師教育機関について、宮本は①師範学校およびその発展としての師範大学・教員大学、②一般大学の教育学部と教育学大学院、③教員養成を主たる目的とはしないが、教員養成課程が認定されていた教養大学、の3種類を挙げている（宮本 2006, p.134）。この指摘に鑑みれば、イギリスにおいてはアメリカとは異なり、必ずしも教員養成機関の大学化に向かって動いていたわけではなかったということができる。

イギリスにおいては、非大学高等教育機関の大学昇格による高等教育の一元化[5]と、「学校ベース」の教員養成の促進がほぼ同じ時期（1992年前後）に起きた。それゆえに、1990年代以降の教師教育研究は「学校ベース」の教員養成の有効性についての考察や、教員養成における大学の役割を軽視する政策への批判という形で展開されることが多く（例えばMurray / Mutton 2016）、そもそも教員養成における大学の役割とは何である／であったのかについて、再検討する形では進んでこなかった。教員養成のあり方が学術的にも実践的にも問われている今、大学における教員養成が歴史的にどのような担い手によってどのように発展してきたのかについて再検討することが必要不可欠であるといえる。

このような研究状況を踏まえて、本研究では、イギリスの大学における教員養成の嚆矢といえるDTCに注目する。日本におけるDTCに関する先行研究として、岩本（1992）が挙げられる。同論考は、寄宿制教員養成カレッジやクロス委員会報告等、DTCの設立に至るまでの教員養成の展開に重点が置かれ、DTC自体に関する記述は概説に留まっている。そこで、本研究では、DTC（後のUniversity Department of Education（UDE）、大学教育学科／学部）に焦点化して検討

を行う。

DTCに関する研究は、日本のみならずイギリス本国においても十分な蓄積があるといいがたい。例えば、イギリス教師教育に関する二つの通史においても、DTCに関する言及は簡潔なものに留まっている（Rich 1933; Dent 1977）。DTC研究として重要なものには、トーマスの一連の研究（Thomas 1978, 1992; Thomas ed. 1990ほか）が挙げられる。トーマスによれば、DTCの最も重要な貢献は、教育（学）研究（study and research in education）の発展を促進したことであるが、近代的大学の発展に寄与したことも過小評価されるべきではないと指摘されている（Thomas 1978, p.259）。大学史研究の一部においては、DTCが近代大学の発展に寄与したことが指摘されてきた（Vernon 2004; Anderson 2006; Armytage 1955）。しかしその意義は教師教育研究でも大学史研究でも十分に注目されてこなかった。

その他、DTCについては、教育史学者のマカロックら（McCulloch / Cowan 2018）でも言及されているが、教育学研究についての論稿であることもあってか十分に検討されているとはいいがたい（山崎 2024参照）。オルドリッチ（Aldrich 1995 = 2013）および本多（2019）はイギリス初の「教育学教授」ジョゼフ・ペイン（Joseph Payne）についての研究を行った。しかし、ペインが教育学教授に就任したのはカレッジ・オブ・プリセプターズ（College of Preceptors）という、大学やユニヴァーシティ・カレッジとは一線を画す教育機関（Aldrich 1995 = 2013；本多 2019参照）であり、本研究が注目する、大学附属機関として始まり後に教育学部となるDTCとは異なるタイプのものである。日本におけるイギリス教師教育（史）研究としては、歴史学者の松塚（2001）による19世紀までの教師に関する論考が挙げられるが、DTCの設立以降の歴史についての言及はない。大学と教員養成について注目した研究としては高野（1997, 2000, 2005）があるものの、戦後教員養成改革についての検討が中心であり、DTCの設立についてはカバーされていない。

本研究においては、各大学につくられたDTCのなかでも、特にマンチェスター大学DTCを取り上げ、分析を行う。理由は以下の三点である。第一に、マンチェスター大学は、「教師の教育に最も早く関わり始めた大学」（Furlong 2013, p.16）であり、「より成功した教育学研究の中心の一つ」（McCulloch 2018, p. 20 = 2023, p.32、訳文は引用者による）とみなされている一方で、トーマスによる事例研究対象からは漏れているためである。第二に、マンチェスター大学に特化した研究としてはロバートソン（Robertson 1990, 1992）の一連の論稿が挙げられるが、大学における教員養成という観点での分析という点では十分になされていないためである。第三に、後述するように、多様な要素が組み合わさって展開した興味深い事例であり、かつ、一次資料が書籍というまとまった形で残されているためである。

マンチェスター大学は、1851年設立のオウエンズ・カレッジ・マンチェスター（Owens College, Manchester）を前身とし、1903年に大学に昇格した高等教育機関である。大学昇格の前は、オウエンズ・カレッジおよびリヴァプールのユニヴァーシティ・カレッジ（University College, Liverpool）、リーズのヨークシャー・カレッジ（Yorkshire College, Leeds）を構成カレッジとする「連合制」大学であるヴィクトリア大学（Victoria University、1880年設立）に属していた[6]。教育は各カレッジで行われ、学位授与は大学からなされた。本研究においては、混乱を避けるために大学昇格前の時期でも基本的にマンチェスター大学という名称を用いるが、必要に応じて当時の名称のまま記載している箇所もある。

分析を行うにあたって用いる資料は、マンチェスター大学が出版した「教育シリーズ」（Educational Series）である（University of Manchester 1908a, 1911a, 1911b）。University of Manchester（1911a）では、当時教育学教授であったマイケル・サドラー（Michael Ernest Sadler、経歴等詳細については後述）および方法論担当教員（Master of Method）であったグッド（W. T. Goode）が、それぞれDTCとマンチェスター大学DTCについて概説を書いている（Sadler 1911; Goode 1911）。つまり、サドラーおよびグッドの論稿は、当時の教員養成に携わっていた当事者がDTCについて述べた一次資料である。加えて、マンチェスター大学の卒業者名簿も補完的に用いる（University of Manchester 1908b）。

2．Day Training Collegeの概要

（1）前提としての教員養成機関の類型

20世紀初頭イギリスの教師教育機関は、①1839年以降に任意団体（主に宗派団体）によって設立された寄宿制の教員養成カレッジ[7]、②1890年以降に大学又はユニヴァーシティ・カレッジ附設として設立されたDTC、③1902年教育法によって設立が可能となった地方教育当局（LEA）立の教員養成カレッジ、の3つが挙げられる（Board of Education 1910, pp.58-60）。①と③はともに高等教育段階ではない教員養成機関であるが[8]、①は基本的に寄宿制であり③は通学制が基本であるという点で異なっており、設置者という点でも違いがある。本研究で注目する②は、高等教育機関に附設された教員養成機関であり、後に大学の正式な一部局として位置づけられていくという点で、①③とは大きく異なっている。イギリスの大学における養成について考察するためには、DTCについての検討が不可欠である。①③と②の違いは、1960年代に高等教育の二元制が敷かれていく際に、より明確な区分になるという点でも注目に値する。

（2）大学附設のトレーニング・カレッジの提唱

DTCの起源、生成と発展についての論稿（後述）のなかでサドラーは、「J.G.フィッチ氏が、1876年に、中等学校教員のためのトレーニング・カレッジを大学またはユニヴァーシティ・カレッジに附設することを提唱した」（Sadler 1911, p.16）ことを、DTC設立に至る背景の1つとして指摘している。J.G.フィッチ（Sir Joshua Girling Fitch, 1824-1903）は、有名な勅任視学官の一人である（高妻2007, pp.81-87）。彼は1838年にバラ・ロード校（Borough Road School）の見習い教員になり、1842年に正式なアシスタント（full assistant）、その後にキングスランド・ロード校（Kingsland Road School, Dalston）の校長になった。1850年にロンドン大学の学士号（BA）、1852年に同大学の修士号（MA）を取得している。同年、バラ・ロード教員養成カレッジのスタッフになり、直後に副学長、1856年にはコーンウェル（Dr. James Cornwell）の後を継いで学長となった[9]。後述のクロス委員会の参考人（witness）も務めた（当時の肩書はH.M. Chief Inspector of Training Colleges for Schoolmistresses）。

これは、当時の見習い教員制度の下で教員養成に携わっていた当事者自身が、大学が教員養成に関与することを提唱した、という点で注目に値する。フィッチ本人は、疑似的な徒弟制（*quasi*-apprenticeship、イタリック原文）や特別な教員養成カレッジの設立では十分ではなく、特に中等

教員養成の課題の解決は「大学の活動、教育の技芸と科学（art and science）に関する教授職の設置、それに対応する試験、奨励（encouragements）[10]、ディプロマなどに求めるべきである」（Fitch 1876, p.116）と述べている。

（3）クロス委員会報告とDay Training Collegeの設立

DTCの直接のきっかけとなったのは、1888年基礎教育法に関する王立委員会（Royal Commission on the Elementary Education. Acts）、通称クロス委員会（Cross Commission）報告である。同報告を契機として、各大学およびユニヴァーシティ・カレッジは、教員養成機関であるDTCを設置するようになる。クロス委員会は、「地元のユニヴァーシティ・カレッジと連携して非寄宿生のトレーニングを行うという試みを行うこと」を勧告した（Cross Report, p.211）。クロス委員会報告を受け、1890年教育令（Code）には、大学あるいはユニヴァーシティ・カレッジに附属するDTCに関する規定が盛り込まれた（Fiddes 1937, p.171）[11]。クロス委員会がDTC設立を勧告した背景には、当時の教員養成の主流であった寄宿制教員養成カレッジの（寄宿制であるがゆえの）閉鎖的性格への批判があったとされ（岩本1992, p.83）、「一般教養の極端な不足」（ibid., p.93）も問題視された。

同委員会報告ではオックスブリッジではなく地方の新興ユニヴァーシティ・カレッジが教員養成に関わることが想定されていたが、実際には、オックスフォード大学（1892年）、ケンブリッジ大学（1891年）[12]ともに早い段階でDTCを設立した。1895年の時点で、イギリスにおいて12校のDTC[13]があった（Thomas 1990, p.14）。

3. マンチェスター大学DTC

（1）DTCの設立

マンチェスターの通学制教員養成カレッジ（the Manchester Day Training College, the Owens College, Manchester）は、1890年5月16日に設立計画が可決され、同年10月に開校した（Goode 1911, pp.55-56）。DTCは設立時、マンチェスター大学附設という位置づけであった。つまり厳密にいえば、大学とは別の組織としての位置づけであったということである。これはマンチェスターに限ったことではなく、他のDTCでも同様であった。付言すると、医学部も当時はMedical Schoolとして大学附設の機関であった。設立当初のDTCの状況については、サドラーが以下のように指摘している。

> 「〔マンチェスターDTCは〕1890年10月、25名[14]の学生を迎えてスタートした。学生たちはラテン語が非常に苦手であったが、週4回のチュートリアルクラスによってその難題を克服し、年度末には通常のカレッジ・コースに通うようになった。17名がヴィクトリア〔1880年設立の連合制のヴィクトリア大学〕の予備試験に申し込み、可能であれば文学士あるいは理学士を目指す予定であった。」（Sadler 1911, p.37）（〔　〕内は引用者による注である。以下同様。）

この言及からもわかるように、DTCの学生には、学位取得の可能性が開かれていた。ただし、DTC設立初期においては、学位取得のための教育と専門職トレーニングが同時並行で行われていたため、学生への負担が大きかったという指摘もフィデスによるマンチェスター大学史においてみられる（Fiddes 1937, p.177）。加えて、1890年の設立以降、マンチェスターDTCにおいては学位取得準備のためのアーツ・サイエンス教育を受けることが義務づけられていたとも指摘されている（ibid.）。しかし後述のように、実際には学位取得に至らなかったとみられる学生もいることがわかる。1896年教育令では、「アーツあるいはサイエンスにおいて、イギリスのいずれかの大学の卒業生、または試験によって大卒の資格を得た者[15]は、大学または団体組織（Collegiate body）[16]が発行し、〔教育〕局〔教育院の前身であるEducation Departmentのこと〕が認めた教授の理論と実践（theory and practice of teaching）の実力を証明するものを所持していることを条件に、免許教員（certificated teachers）として認められる」（Sadler 1911, p.45）とされている。1911年には政府の規則（Regulation）が変わり、政府からの助成金が4年間に延長された。この変更によって、学生は初めの3年間学位取得のために学び、その後の1年間で専門職トレーニングを受ける、という構成に変わった（Fiddes 1937, p.177）。

マンチェスターDTCは当初、初等教員養成のために設立されたが、行われていることは中等教員の養成にも資する内容であると認識されるようになり、1892-93年度には中等教員を目指す者のための「教授の理論と実践」という科目が開設された（ibid., p.173）。その後、1894年に教員ディプロマ（teacher's diploma、大学が授与する称号）コースが作られ、1895年から少数ではあるが同コースを受講する学生が出てきた。1905年には、教員ディプロマは理論と実践を学ぶ学卒後の1年間のコースになった（Salder 1911, p.65）。戦後イギリスの教員養成に関する先行研究においては、主に中等教育段階の教員は学位取得後にトレーニングを受けるという「積み上げ型（consecutive）」の養成方法が主流となったこと（PGCEは1970年代に拡大した）が指摘されてきたが（例えば高野 2015, p.213）、大学における教員養成の初期に積み上げ型ともいえる教員養成がなされていたこと確認できる。

また、マンチェスターDTCの特徴の一つとして、実験学校（Demonstration School）の存在が挙げられる。名称は「フィールデン実験学校（Fielden Demonstration School）」であった（University of Manchester 1908a, p.20）。同校は、「少なくとも象徴的には大学の強力な支援を受けて、1903年に印象的な正式な開校を果たした」（Robertson 1992, p.368）とされる。フィデスは、「フィールデン学校での取り組みの価値は教育院によってすぐに認められた。視学官の訪問によって、次の教員養成カレッジに関する教育令には、その後設立されるすべてのカレッジは設備の一部として実験学校を設置するという規定が盛り込まれた。」（Fiddes 1937, p.176）と指摘し、当時から高く評価されていたことを示した。

（2）DTCから教育学科、そして教育学部へ

DTC設立当時、専門職トレーニングのためのスタッフは、前述の方法論担当教員（Master of Method）グッドひとりであった（Goode 1911, p.56）。彼は、「教育理論の講義、学校実習の手配と監督、読解と朗読の授業、そしてフランス語やラテン語といった〔学生が受講している〕学術的な科目の指導（coach）」（Fiddes 1937, pp.171-172）という、幅広い仕事を担当していた。1892年に

は、女子部の開講とともに、その方法論担当教員（Mistress of Method）としてドッド（Catherine Isabella Dodd）が着任した（Goode 1911, p.58）。

大きな変化がもたらされたのは1899年であった。この年、マンチェスター大学に教育学教授（Professor of Education）のポストが設けられた。また、教育学科（Department of Education）として組織化され、統一された（Fiddes 1937, p.174）。教育学教授のポストは1901年、地元の篤志家であるサラ・フィールデンからの寄付が利用され[17]、「サラ・フィールデン教育学教授（Sarah Fielden Chair of Education）」という名称の教授職／講座となった。初代教授には、バラ・ロード教員養成カレッジ学長のウィザーズ（H.L. Withers）が着任した。その選任の過程において、歴史学教授T. F. タウト（Thomas Frederick Tout）（大中 1996参照）と、哲学教授S. アレクサンダー（Samuel Alexander）が、「教育（学）研究に学術的厳密性を与えるような教授職」を望み、30名もの候補者が精査・否認された後に、ウィザーズに決まった（Robertson 1990, p.146）。

その後、ウィザーズの急逝（1902年）に伴って、1903年に新たな教授が2名、着任した。1名は、J.J. フィンドレイ（Joseph John Findlay）、もう1名は前述のM. サドラーである。フィンドレイにはドイツ留学経験があり、「イエナ大学のウィルヘルム・ラインを敬愛し、その弟子でもあった」（Robertson 1992, p.363）といわれる。帰国後は、キング・アルフレッド校（King Alfred School）の校長を務め、進歩主義教育にも携わっていた人物であった[18]。また、イギリスへのジョン・デューイ紹介に貢献したともいわれることもある（Brehony 1997）。彼はサラ・フィールデン教育学教授のポストを得た。サドラーは、その後に着任したリーズ大学学長として、あるいは教育行政官として著名な人物[19]ではあるが、1903年から1911年まで、マンチェスター大学で、パートタイムの教育史および教育行政教授（History and Administration of Education）を務めた。サドラーのポストは、いわゆる「確立された教授職（established chair）」（安原 1979参照）ではなく、個人の業績等に鑑みて任命される「個人のための教授職（personal chair）」であった。マンチェスター大学教育学科は1914年、教育学部（Faculty of Education）となった（Fiddes 1937, p.177）。

（3）大学のなかのDTC：学生の学歴・進路から読み取れるもの

本節では、DTCの学生の学歴と進路がいかなるものであったのかについて、一次資料をもとに確認していきたい。マンチェスター大学教育学科（Department of Education）の記録には、1890年から1910年までのDTC生の氏名と性別、入学年、所有資格、所属、連絡先（勤務先や住所）等が書かれている（University of Manchester 1911a）。これらの情報を集計すると、以下が明らかとなる。

1890年から1910年までの入学者は1,119名（男性591名、女性528名）であった。そのうち、記録上1910年の時点で教員（assistant master / mistress）として在職した経験があると記されている者は427名（男性270名、女性157名）、校長（headmaster / headmistress）は32名（男性21名、女性11名）であり、教員経験、校長経験ともにある者も確認できる。つまり、入学者のうち、男性は45.6％、女性は29.7％が教員になったといえる。教職に就いた者以外の進路は明記されていないことが多い（住所のみなど）のであるが、例えば、マンチェスター教育委員会（Education Committee）のアシスタント視学官になった者や、エディンバラで石炭事業（coal business）に従事し

ている者などが確認できる。

また、学位を取得したと明記されている者は571名（男性320名、女性251名）であった。ただし、必ずしもマンチェスター大学（1903年以前はヴィクトリア大学）の学位を取得した者ばかりではなく、ロンドン大学の学位、オックスフォード、ケンブリッジ両大学の学位[20]など、他大学の学位取得者も少数ながらいた。また、必ずしもマンチェスターに限ったことではないが、見習い教員として中等教育を受けてからDTCに入学し、大学を卒業した学生もいた。学位取得と教職との関係について見てみると、学位未取得者548名のうち、男性71名、女性32名が教職に就き、学位取得者571名のうち、男性199名、女性125名が教職に就いたことが資料では示されている。

次に、ディプロマコースについては、1894年から1910年までで合計143名が入学し、そのうち71名が教員となり、121名が学位を取得した[21]。ディプロマコースの対象者は基本的に学位取得者であるものの、取得学位が明記されておらず、学位未取得であるとみられる者も確認できる。

マンチェスター大学という規模で見ると、例えば1913-14年度においては、大学全体の男子学生数は1,291名でそのうち教育学科は147名、女子学生364名のうち133名が教育学科の学生であった。つまり、男子学生の8%、女子学生については1/3以上が教育学科に所属していた（Fiddes 1937, p.178）。特に女子学生について、教育学科の需要は高かったこと、男子学生についても割合こそ高くはないものの、一定程度の需要があったことが見て取れる。女子学生については、必ずしも教員志望者は多くなかったという指摘もある（Vernon 2004, p.129）。確かに、教職に就く者の割合は女性の方が低いが、男性も教職に就く者ばかりでもなかったことがマンチェスター大学の資料からはわかる。

以上のように、DTCの学生の経歴は多様であった。学生にとっては、DTCで学ぶということは、専門職トレーニングを受ける機会であると同時に、それだけに留まらず、あるいはそれ以上に、当時としてはごく少数にしか開かれていなかった大学教育を受ける機会、学位を取得する機会を得ることができるという点で利点があるものであったといえる。

他方、大学側から見ても、DTCの学生が大学のアーツ・サイエンス教育を受けることには利点があった。19世紀後半以降イギリスの地方都市に新しい高等教育機関が設立され、20世紀初頭に大学として昇格していくという流れのなかで、そうした新興高等教育機関のアーツ・サイエンス教育のニーズは必ずしも高くなかった。各機関では、それぞれの都市においてニーズがあった様々な技術・専門職教育を提供したが、一方で、「大学ランクの教育」、あるいは「高等なリベラル教育」の中核を成すのはアーツ・サイエンス教育であると見なされてもいた。当時の大学補助金の視察においても、「大学水準の教育」の達成度はアーツ・サイエンス教育の質と量で測られていた（山崎 2021）。前述の通り、DTCははじめ大学本体の一学部ではなく附設の機関として設置され、DTCの学生は、DTCに所属すると同時に大学の学生でもある、という形態であった。つまり、DTCの学生が増えるということは、大学の最も重要なパートとみなされていたアーツ・サインスの学生が増えることを意味していた。アーツ・サイエンス教育科目を履修するDTC生は、大学にとって、学生の確保という点で歓迎すべき存在でもあった。

4．マンチェスター DTCにみる教育理念：フィンドレイとサドラー

ここでは、初期のマンチェスター DTCの発展に重要な役割を果たした2名の教授、フィンドレイとサドラーの言葉から、当時の関係者がDTCの意義をどのように捉えていたのか、どのような教育理念を掲げていたのかについて明らかにしたい。

フィンドレイは、教育学部になる前年の1913年に、「大学における教員の養成」という題目で寄稿をしている。そこで彼は、現状を「専門職全体のトレーニングに関する活動をリニューアルする前夜にある」とし、「教育院によるレビューだけでなく、教育専門職（teaching profession）そのものに対するレビューも行われるだろう」との認識を示している（Findlay 1913, p.839）。その上で、「あらゆるトレーニングのための機関にとって中心的問題は、理論と実践の相互作用（*the interaction of theory and practice*）に関連している」（ibid., p.840、イタリック原文、以下同様）と述べた。

フィンドレイにとっては、「実践」には2つの目的があった。まずは、「普通の実践家によって一般的に認識されているように、初心者に日々の仕事について知ってもらうこと」である。「しかし、単なる実践である実践は、成功の半分に過ぎない」と彼は続ける。「より難しく、真に知的な努力は、メカニズムを理解し、その背後にある原動力を理解することである。つまり、理念と結果、そして理論と実践の相互作用を見定めることである。」（ibid.）

このように理論と実践の相互作用の重要性を強調したフィンドレイであったが、大学の役割については、以下のように述べている。

> 「この点での〔大学の教育学科の〕義務がどれほど緊急であるかは注目に値する。なぜならば、そのような部門は単に普通の実践家を養成するためのトレーニング場ではないためである。他の大学学科と同様に、その仕事は二重のものである――先を見据えて学生と〔大学の〕講師が一丸となって努力し、目下のプロフェッショナルな実践を解明し、より大きくより深い原則に照らしてこれを検討しなければならない。言い換えれば、理論と実践の相互作用は、教育学科にとって最も困難であると同時に最も不可欠な義務であるようにみえる。」（ibid., p.841）

フィンドレイのいう「理論と実践」とはいかなるものであったのか。理解の一助になると思われるのは、ロバートソンが紹介した、フィンドレイが1905年に大学の評議会に提出した親展のメモである（Robertson 1992, p.362）。

> 「養成中の教員に、教養（liberal culture）とその仕事に必要な特に専門職的な準備の組み合わせ（combination）を保障することが必要である。この専門職的な素養（professional equipment）には、教職に必要なアーツおよびサイエンス両方の知識も含まれる。学生にとっての利益（特に哲学的観点からの利益）を軽視することなく、実習室で追求されるものと類似した観察、実演、実験の方法の重要性を強調する必要がある」（Robertson 1992, p.368）

注目すべきは、フィンドレイが、教養やアーツ・サイエンスの知識の重要性について触れていることである。これは、当時から専門職トレーニングだけではなく学術的な教育との組み合わせが重視されていたことを示す点で重要である。この点を踏まえるならば、フィンドレイの「理論と実践」における「理論」とは、教員の実践に直接的に関係するような理論――例えば教授法のような――だけを指すものではなく、より広い意味での理論――多様な教育学研究や場合によってはそれ以外の学問分野も――も含むものであったと指摘することができよう。

ロバートソンは、フィンドレイが、「学校との新たでより積極的な関係にしっかりと基づいた教員養成への新しいアプローチを組織的かつ精力的に推進した最初の教授となった」と指摘しつつ、「教育学科のなかで、教員養成と研究の間に分断を設けないと決意していたが、これは非常に大胆であり、達成するのが非常に困難なものであった」（ibid., p.362）とも述べ、フィンドレイの目指すものが実際には実現が難しかったことを明らかにしている。それゆえ、「理論と実践の相互作用」は、当時のマンチェスター DTCの実相というよりは、教育理念として理解するのが妥当であるといえよう。

フィンドレイと同時期に教育学教授の職にあったサドラーは、2.（2）でも述べたように、1911年に「大学DTC――その起源、発展そしてイギリス教育への影響」という題目の論稿を書いている。その中で、サドラーは、「初等教員はリベラル・プロフェッションから切り離されたキャリアであるというかつて一般的に受け入れられていた概念は、何千人もの教員志望者に大学生活が提供するさまざまな交友関係や知的機会を最大限に享受させる機関の成功によって決定的に弱まった」（Sadler 1911, p.53）と述べている。この言葉からは、1911年の時点でDTCが（少なくとも一定程度以上には）成功していると自負されていること、その強みの一つに知的機会の提供があること、そして、初等教員もまたリベラル・プロフェッションとみなされるべきであるとサドラー自身が考えていたことが読み取れる。

また、サドラーはDTCについて、以下のように総評している。

> 「デイ・トレーニング部門〔DTCのこと〕は、アーツ学部やサイエンス学部の大学生の数を大幅に増加させた。イギリスの大学生活における〔男女〕共学の側面を発展させた。教育専門職（teaching profession）に就くための学生のトレーニングに関して、新しい大学（new Universities）と教育院との間に緊密な関係を築くことになった。また、基礎教育学校だけでなく、中等学校の教員の専門職トレーニングを行うための機関（facilities）も提供した。そして、教育の科学（science of education）が他の研究形態（other forms of research）と並んだり、密接に関連したりしながら、学術研究（academic studies）の輪の中にあることを確認した。」（ibid., p.54）

フィンドレイとサドラーの言葉から、マンチェスター DTCで何が重視されていたのか、どのような理念に基づいていたのかということをまとめると以下のようになるであろう。

まず、アカデミックな面での教育と専門職トレーニングの両立が模索されていたことである。イギリスにおいては、大学における教員養成が始まった当初、両者は組織上、別個のものとされていた。しかし重要なのは、当時の教員養成関係者が両者を単純に切り離せばよいと考えていた

わけではなく、むしろいかに架橋していくかを模索していたことである。前述した「理論と実践の相互作用は、大学教育学科にとって最も困難であると同時に最も不可欠な義務であるようにみえる」（Findlay 1913, p.841）というフィンドレイの言葉はそれを端的に表しているといえる。

もう一点重要なのは、アカデミックな教育と専門職トレーニングの両立を目指す際に、「大学における」教員養成であることが意識されていたことである。そこでは、学校教員はアーツ・サイエンスの知識を含むアカデミックな素養を持つべき存在であるということ、そのためには大学での教育と研究が重要であると考えられていた。

5．おわりに

本論で見てきたように、マンチェスター DTCは、学生だけではなく大学本体にも利益をもたらしながら、発展していった。DTCが大学本体の発展に利益をもたらす存在であったことは大学史研究の一部で指摘されてきた（Vernon 2004; Anderson 2006; Armytage 1955）が、本研究はこの知見に加えて、大学と教員養成が互恵的な関係にあったことを指摘するものである。

また、設立初期のマンチェスター DTCの中心的人物であるフィンドレイとサドラーの言葉からは、今日の教師教育に関する論点の一つである「理論と実践」のあり方――フィンドレイの言葉を借りれば「理論と実践の相互作用」――が、大学における教員養成が始まった初期からすでに重要な理念として当時者から認識されていたこと、そしてそれは、アカデミックな基盤の上でこそ追求されるべきものであると考えられていたことが明らかとなる。これは、今日のイギリス教員養成政策の背景にある教職観（山崎 2017a参照）、すなわち、アカデミックな点で優れてさえいれば教員足りうるとして専門職トレーニングを不要とする立場とも異なるし、教育（学）研究は学校でこそ行えるとして教員養成における大学の役割を軽視する立場とも異なっている。本研究の知見は、近年のイギリスで進行している大学を排除した形での教師教育改革の動向に再考を迫るものでもあるといえよう。

本研究においては、マンチェスター DTCの設立と発展の歴史を通して、イギリス最初期の大学における教員養成の理念を明らかにすることを試みた。しかし、マンチェスター以外の事例やDTCにおけるトレーニングや大学における教育の具体的な内容（カリキュラム）などは十分に検討することができなかった。これらについての考察は、今後の課題である。

1　本研究におけるイギリスとは、基本的にイングランドを指す。

2　Day Training Collegeとは、寄宿制ではない、通学制の教員養成カレッジのことである。通学制教員養成カレッジには、後述のように、大学（およびユニヴァーシティ・カレッジ）附設のものと1902年教育法以降に主にLEAが設立したものがある。しかし、一般的にDTCといえば、前者の大学附設のものを指すため、本研究においても大学附設の通学制教員養成カレッジを指すものとする。

3　Teacher training college / college of educationは、教員養成カレッジあるいは教育カレッジと訳す方が訳語としてはより正確である。しかし、本研究の主たる検討対象であるDTCを通学制教員養成カレッジと訳出しているため、ここでは混同を避けるためにあえて師範学校という訳語を用いている。

4　例えば、1925年の教員養成機関の定員については高野（1997, p.4）、1940年代の定員については高野

（2000, p.75）参照。

5　1992年継続・高等教育法によって、ポリテクニク等、非大学の高等教育機関が大学になった（山崎 2017b）。

6　オウエンズ・カレッジは、リヴァプールとリーズがそれぞれ大学昇格した後、ヴィクトリア大学を引き継ぐ形でマンチェスター大学として昇格した（山崎 2021参照）。

7　イギリスにおける最初期の教員養成として挙げられるのが、内外教育協会系（British and Foreign School Society、略称BFSS）のバラ・ロード校の中に置かれたバラ・ロード師範学校である（松塚 2001）。また、19世紀の教員養成の重要な画期の一つとして、1840年2月に最初の入学生を迎えたバタシー師範学校（Battersea Normal School）の設立が挙げられる（Rich 1933, pp.55-79）。これらはレジデンシャル・カレッジ、つまり寄宿制カレッジであった。

8　当初師範学校は高等教育段階とはみなされていなかったが、1960年代以降非大学の高等教育機関とみなされるようになった。

9　DNB, *Dictionary of National Biography*, 1912 supplement, Volume 2, Fitch, Joshua Girling by Foster Watson, pp.27-28

10　ここでの意味合いは、「大学による講義出席への奨励」（Fitch 1876, p.114）を指すと考えられる。

11　加えて、「学生の規律と道徳的監督、および専門的講義やその他の講義への定期的な出席に責任を負う地方委員会が設置されることになっていた」（Fiddes 1937, p.171）。

12　なお、ケンブリッジ大学には1879年にケンブリッジシンジケートが創設されており、DTC設立前から教員養成に関わっていた。1885年にはケンブリッジ教員養成カレッジが設立されている（Hirsch / McBeth 2004参照）。

13　中等教育段階の教員養成を目指した機関が多かったが、例えばオックスフォード大学では、DTC設立以前から、基礎教育段階の教員への教育を視野に入れていた（Tomlinson 1968, p.292）。

14　教育学科の記録では24名が確認できる（University of Manchester 1911a）。

15　例えばロンドン大学では、所定のカリキュラムを修めた者ではなくても、学位試験に合格することによって学位を得ることができた。

16　1897年教育令では、ケンブリッジ、ロンドン、ダラム、エディンバラ、ヴィクトリアの各大学と、カレッジ・オブ・プリセプターズが挙げられているとサドラーは指摘している（Sadler 1911, p.45）。

17　同氏から教育学教授職のために1,000ポンドの寄付があったことが1901年の教育院への報告書に記載されている。（Board of Education 1901, p.337）

18　キング・アルフレッド校時代の実践については、山﨑洋子（2022）第4章、およびBrooks（1992）参照。

19　中等教育に関する王立委員会（Royal Commission on Secondary Education）、通称ブライス委員会（Bryce Commission）の委員も務めた。また、サドラーは、リーズ大学学長時代（1911-23年）に「教育の新理想（New Ideals in Education）」に関わっていたことが山﨑洋子の研究によって明らかにされている（山﨑 2022, pp.79-81）。なお、1885年から自身の母校でもあるオックスフォード大学の大学拡張講義運動の第2代事務局長に就任して活動していた大学拡張講義については、安原（2006）第2節参照。

20　オックスブリッジに関しては、最終試験に合格しても、女性への学位授与がオックスフォードは1920年まで、ケンブリッジは1948年まで認められなかった（香川 2023, p.93）。ただし、DTCの記録上では学位と同等の扱いであるため、本研究においても学位取得者として数えている。

21　「内外事項区分論」の論者（佐藤 2007参照）として知られるアイザック・キャンデル（Isaac Leon

Kandel）は、マンチェスター DTC 出身の学生で最も有名な人物の一人といえる。彼は、1899年にマンチェスター大学（当時はヴィクトリア大学）の古典語の学士課程コースに入学し、1902年に文学士を授与された。その後、1905年にDTCのディプロマコースに登録し、1906年に教員ディプロマを取得した。同時に、文学修士号（MA）も取得している（University of Manchester 1908b, p.204）。

【引用・参考文献】

岩本俊郎（1992）「イギリスにおける Day Training College の成立について」『立正大学人文科学研究所年報』別冊8、pp.82-95

大中勝美（1996）「マンチェスター大学歴史学科の成立過程」『大学史研究』12、pp.68-77

香川せつ子（2023）「高等教育［英米］」山口みどり他編『論点・ジェンダー史学』ミネルヴァ書房

高妻紳二郎（2007）『イギリス視学制度に関する研究』多賀出版

佐藤修司（2007）『教育基本法の理念と課題』学文社

高野和子（1997）「教員養成における大学の役割（その1）」『明治大学人文科学研究所紀要』43、pp.1-27

高野和子（2000）「教員養成における大学の役割（その2）」『明治大学人文科学研究所紀要』47、pp.69-81

高野和子（2005）「教員養成における大学の役割（その3）」『明治大学人文科学研究所紀要』56、pp.85-115

高野和子（2015）「イギリスにおける教員養成の「質保証」システム」『明治大学人文科学研究所紀要』77、pp.209-242

本多みどり（2019）「イギリスにおける「教育学教授」誕生の背景」『日本の教育史学』62、pp.86-99

松塚俊三（2001）『歴史のなかの教師』山川出版社

宮本健市郎（2006）「ウィネトカ教員大学院大学設立の意義」『神戸女子大学文学部紀要』39、pp.123-137

安原義仁（1979）「イギリス大学の講座創設に関する研究序説」『日本の教育史学』22、pp.83-107

安原義仁（2006）「大学拡張講義の講師たち」松塚俊三・安原義仁編『国家・共同体・教師の戦略』昭和堂

山﨑洋子（2022）『イギリス新教育運動の生起と展開』知泉書館

山崎智子（2017a）「イングランド教員養成政策における「学校ベース」の含意の変容」『比較教育学研究』54、pp.110-130

山崎智子（2017b）「大学のしくみ・制度」日英教育学会編『英国の教育』東信堂

山崎智子（2021）『イギリス大学制度成立史』東信堂

山崎智子（2024）「イギリス教育学研究に関する動向と日本における受容」『北海道教育大学紀要（基礎研究編）』75（1）

Aldrich, R.（1995）*School and Society in Victorian Britain: Joseph Payne and the new world of education*, Garland Pub.（＝リチャード・オルドリッチ（2013）『イギリス・ヴィクトリア期の学校と社会』本多みどり訳、ふくろう出版）

Anderson, R.（2006）*British Universities: Past and Present*, Hambledon Continuum

Armytage, W.H.G.（1955）*Civic Universities: Aspects of a British tradition*, E. Benn

Board of Education（1901）*Reports from Universities and University Colleges Participating in the Parliamentary Grant, 1901*, HMSO

Board of Education（1910）*Report of the Board of Education for the year 1908-1909*, HMSO

Brehony, K.J.（1997）‘An 'Undeniable' and 'Disastrous' Influence? Dewey and English Education（1895-1939）’, *Oxford Review of Education*, 23（4）, pp.427-445

Brooks, R.（1992）‘Professor J. J. Findlay, The King Alfred School Society, Hampstead and Letchworth Garden City Education, 1897-1913’, *History of Education*, 21（2）, pp.161-178

Cross Report（1888）*Final Report of the Commissioners appointed to inquire into the Elementary Education Acts, England and Wales*, HMSO

Dent, H.C.（1977）*The Training of Teachers in England and Wales, 1800-1975*, Hodder Arnold

Goode, W.T.（1911）‘The Department of Education in the University of Manchester ‘, in *The Department of Education in the University of Manchester*.

Fiddes, E.（1937）*Chapters in the History of Owens College and of Manchester University 1851-1914*, Manchester University Press

Findlay, J.J.（1913）‘The Training of Teachers in a University’, *The Journal of Education*, December

Fitch, J.G.（1876）‘The Universities and the Training of Teachers’, *Contemporary Review*, pp.95-116

Furlong, J.（2013）*Education – An Anatomy of Discipline*, Routledge

Hirsch, P. / M. McBeth（2004）*Teacher Training at Cambridge*, Woburn Press

McCulloch, G. / S. Cowan（2018）*A Social History of Educational Studies and Research*, Routledge（= G.マッカロック／S.コーワン（2023）『イギリス教育学の社会史』小川佳万・三時眞貴子監訳、昭和堂）

Murray, J. / T. Mutton（2016）‘Teacher Education in England: Change in abundance, continuities in question’, The Teacher Education Group, *Teacher Education in Times of Change*, Policy Press

Rich, R.（1933）*The Training of Teachers in England and Wales During the Nineteenth Century*, Cambridge University Press

Robertson, A.（1990）‘“Between the Devil and the Deep Sea”. Ambiguities in the Development of Professorships of Education, 1899 to 1932’, *British Journal of Educational Studies*, 38（2）, pp.144-159

Robertson, A.（1992）‘Schools and Universities in the Training of Teachers: The Demonstration School Experiment 1890 to 1926’, *British Journal of Educational Studies*, 40（4）, pp.361-378

Sadler, M.E.（1911）‘University Day Training Colleges: Their Origin, Growth, and Influence in English Education’, in *The Department of Education in the University of Manchester*.

Thomas, J.B.（1978）‘The Day Training College: A Victorian innovation in Teacher Training’, *British Journal of Teacher Education*, 4（3）, pp.183-195

Thomas, J.B. ed.（1990）*British Universities and Teacher Education: A Century of Change*, Falmer Press

Thomas, J. B.（1992）‘Birmingham University and teacher training’, *History of Education*, 21（3）, pp. 307-321

Tomlinson, L.（1968）‘Oxford University and The Training of Teachers’, *British Journal of Educational Studies*, 16（3）, pp.292-307

University of Manchester（1908a）*The Demonstration Schools Record*, No.1, Manchester University Press.

University of Manchester（1908b）*The Victoria University of Manchester: Register of Graduates up to July 1st, 1908*, Manchester University Press

University of Manchester（1911a）*The Department of Education in the University of Manchester*, Manchester University Press

University of Manchester（1911b）*Outline of Education Courses in Manchester University*, Manchester University Press

Vernon, K.（2004）*Universities and the State in England, 1850-1939*, RoutledgeFalmer

［付記］本研究は科研費（23K02154）の助成を受けた研究成果の一部である。

【Abstract】

Establishment of Teacher Training in the University of Manchester, England
— Focusing on the idea of Day Training College —

Tomoko YAMAZAKI
(Hokkaido University of Education)

This study clarifies the significance of teacher training in universities in England by examining the idea of the Manchester Day Training College (DTC). Today, the teacher education policy in England is seemingly based on the assumption that universities are useless in initial teacher training. Although such policy trends tend to be criticised, limited studies have investigated the historical significance of teacher training in universities. This study focuses on two professors of education at the University of Manchester, namely, Joseph John Findlay and Michael Ernest Sadler, and examines their idea of teacher training in universities.

DTCs were founded in the 1890s in English universities, such as Oxbridge, London, and the so-called civic universities on the basis of the Code of 1890. As institutions for teacher training in universities, DTCs have contributed to the development of universities and teacher training. On the one hand, DTC students could receive professional training and take degree courses in universities. On the other hand, universities could secure a certain number of students who took courses in Arts and Sciences. Hence, the relationships between universities and teacher training were mutually beneficial, and DTCs became university departments of education in the 1910s. Manchester DTC, the Owens College, was established in 1890. It became University Department of Education in 1899, and Faculty of Education was established in 1914.

Professor Findlay, who was appointed to the Sarah Fielden Chair of Education, emphasised the importance of "the interaction of theory and practice." Moreover, he claimed that the combination of liberal culture with specifically professional preparation was important. Furthermore, Professor Sadler, who is famous as an educational administrator and Vice-Chancellor of the University of Leeds, alluded that primary teachers should be and became regarded as part of a liberal profession. He further indicated that DTCs promoted the science of education, that is, educational studies.

In conclusion, one can infer that academic education and professional training were explored in teacher training in universities. Teacher educators, such as Findlay and Sadler, proposed that bridging academic education in universities and professional training in DTCs was important, although DTCs were originally founded as affiliated institutions of universities. School teachers should adopt a liberal culture, and higher education and the development of education-

al studies were regarded as essential to achieve this goal. The teacher educators have considered that theory and practice should be pursued on academic foundation even in the early days of DTCs.

This study suggests that academic education and professional training should be conducted cohesively and that educational studies and research can contribute to teacher education.